岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 44

塚の前古墳

1981年3月

岡山県教育委員会
文化課

序

岡山県は多くの埋蔵文化財が所在することから，その保護保存につきましては特に慎重に対処しておりますが，近年の県土開発事業の増加に伴い各種の問題を生じております。特に圃場整備に係る遺跡の保護保存につきましては困難な問題が内在しており，その調整には苦慮しているところであります。

塚の前古墳は個人の圃場整備ではありますが，現状保存が困難なことからやむなく記録保存の調査を実施いたしました。

調査の成果は本報告書にまとめてありますが，横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の円墳であることが判明しました。石室内部に埋置されていました陶棺も，２基についてはほぼ完形に復元することができました。こうした復元資料もあわせ，本書が文化財の保護保存に活用され，また考古学の貴重な資料として役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが，調査にあたっては専門委員をはじめ，中央町教育委員会，中央町文化財保護委員，地権者等関係各位から多くの援助と助言を得ました。また地元の方々には厳寒の折り発掘作業に従事していただきました。あわせて厚くお礼申し上げます。

昭和56年３月

岡山県教育委員会

教育長　佐藤章一

例　　言

1．本書は岡山県教育委員会が昭和55年度国庫補助事業として実施した「塚の前古墳緊急発掘調査」の報告である。

2．古墳は久米郡中央町打穴下に所在する。

3．発掘調査は平井　勝が担当し，昭和55年（1980年）12月８日から昭和56年（1981年）１月12日まで実施した。

4．出土遺物の整理と復元は下記の方々の協力を得て平井が行なった。
　菅　猛，池田　登，上原留男，黒瀬きしよ，甲元寿恵，坪井和江

5．出土遺物は中央町立中央中学校に保管されている。

6．本書の執筆・編集は平井が行なった。
　なお本書作成の過程で下記の方々の協力を得た。
　井上　弘，山本悦世，北村智子，禰木早苗，網本善光（筑波大学），武田恭彰（中央大学）

7．凡例
　a．第２図の地形図は国土地理院の25,000分の１の地図（津山西部・下弓削）を複製したものである。
　b．レベルは海抜高度ではなく０ポイントを０ｍとして標示している。
　c．方位は磁北を示す。

目　　次

序
例　言
第Ⅰ章　調査に至る経過……1
第Ⅱ章　古墳の位置と歴史的景観……2
第Ⅲ章　調査の経過……4
第Ⅳ章　古墳……6
　第１節　墳丘・周溝……6
　第２節　横穴式石室……8
　第３節　陶棺……10
　　A　１号陶棺……10
　　B　２号陶棺……10
　　C　３号陶棺……13
　第４節　副葬品……14
　　A　陶棺内の副葬品……14
　　B　石室内の副葬品……16
　第５節　石室内出土の中世遺物……24
第Ⅴ章　結語……25

図　目　次

第１図　塚の前古墳の位置……2
第２図　塚の前古墳周辺の古墳分布図（S：$\frac{1}{25000}$）……3
第３図　古墳測量図（S：$\frac{1}{150}$）……5
第４図　トレンチ平面図（S：$\frac{1}{150}$）……6
第５図　トレンチ断面図（S：$\frac{1}{60}$）……7
第６図　横穴式石室実測図（S：$\frac{1}{60}$）……8
第７図　陶棺出土状態（S：$\frac{1}{60}$）……9
第８図　１号陶棺実測図……11
第９図　２号陶棺実測図（１）……12
第10図　２号陶棺実測図（２）……13

第11図　陶棺内遺物分布図…… 14
第12図　陶棺内の副葬品…… 15
第13図　石室内遺物分布図…… 16
第14図　石室内の副葬品（１）…… 17
第15図　石室内の副葬品（２）…… 18
第16図　石室内の副葬品（３）…… 19
第17図　石室内の副葬品（４）…… 19
第18図　石室内の副葬品（５）…… 23
第19図　石室内出土の中世遺物…… 24
第20図　陶棺模式図…… 26

表　目　次

表１　副葬品須恵器計測表…… 20
表２　副葬品土師器計測表…… 20
表３　須恵器杯計測値分布表…… 22

図 版 目 次

図版１　１．塚の前古墳遠景（南から）
　　２．塚の前古墳近景（南から）
図版２　１．古墳の現状（南西から）
　　２．古墳の現状（南から）
図版３　１．発掘調査状況（北東から）
　　２．発掘調査状況（北から）
図版４　１．横穴式石室（北から）
　　２．横穴式石室（南から）
図版５　１．１号陶棺周辺の副葬品出土状態（北から）
　　２．１号，２号陶棺間の副葬品出土状態（東から）
図版６　１．２号陶棺南東部の副葬品出土状態（東から）
　　２．石室入口の副葬品出土状態（南西から）
図版７　１．１号陶棺出土状態（東から）
　　２．１号陶棺内副葬品出土状態（直上から）

図版８　１．２号陶棺出土状態（東から）
　　２．３号陶棺出土状態（北西から）
図版９　１．陶棺取り上げ状況（南から）
　　２．陶棺取り上げ状況（南から）
図版10　１．陶棺取り上げ後の石室（南から）
　　２．石室東側壁（北西から）
図版11　１．石室西側壁（北東から）
　　２．古墳の周溝（北西から）
図版12　１．Ｎトレンチの周溝（南東から）
　　２．ＮＷトレンチの周溝（東から）
図版13　１．Ｗトレンチの墳丘盛土（南から）
　　２．Ｗトレンチの石室掘方（南から）
図版14　１．１号陶棺
　　２．１号陶棺の封じ孔
図版15　１．１号陶棺の受け部木葉痕跡
　　２．１号陶棺底部の小孔
図版16　１．１号陶棺脚部
　　２．１号陶棺内副葬品
図版17　１．２号陶棺
　　２．２号陶棺の重ね部木葉痕跡
図版18　１．２号陶棺の身上端切断痕跡
　　２．２号陶棺の身凸帯
図版19　　石室内の副葬品〈須恵器〉
図版20　　石室内の副葬品〈須恵器〉
図版21　　石室内の副葬品〈須恵器〉
図版22　　石室内の副葬品〈須恵器・土師器〉
図版23　１．石室内の副葬品〈須恵器〉
　　２．甕底部に付着した焼き台
図版24　１．石室内の副葬品〈鉄製品・装飾品〉
　　２．石室内出土の中世遺物

第Ⅰ章　調査に至る経過

古墳は久米郡中央町打穴下に所在するもので，陶棺を内蔵する古墳時代後期の横穴式石室と推定され，小字名を付して「塚の前古墳」と呼ばれていた。位置するところは丘陵斜面で，現在では狭い水田が階段状に数多くつくられている。かつては丘陵斜面に築造されていた古墳も，後世の人力による開墾で一部破壊はされたものの，大部分は水田下に保存され，今日に至っている。

ところが近年の農業機械の発展と，農業政策は大規模な圃場整備を進行させ，当地においてもいたるところで実施されている。このような中で，当古墳の地権者から個人で圃場整備を実施したいとの連絡が中央町教育委員会にあった。町教育委員会と県教育委員会は現地を踏査し，圃場整備の計画について説明をうけるとともに，保存協議を行なったが，現状で保存することは困難と判断されたことから，岡山県教育委員会が国庫補助を受けて記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は専門委員の指導・助言を得ながら，1980年12月８日から1981年１月12日まで平井　勝が担当して行なった。また発掘調査にあたっては中央町教育委員会，中央町文化財保護委員，調査に参加された地域住民の方々，地権者等関係各位から多大な協力と援助を得た。

調査の体制

専門委員

鎌木義昌　岡山理科大学教授（岡山県文化財保護審議会委員）

近藤義郎　岡山大学教授（岡山県文化財保護審議会委員）

水内昌康　岡山女子高等看護学院教頭（岡山県文化財保護審議会委員）

岡山県教育庁文化課

課長	近藤信司	課長補佐	吉光一修
文化財二係長	河本　清	主任	田中建二
文化財保護主事	松本和男	文化財保護主事	柳瀬昭彦
〃	平井　勝（調査担当者）	〃	江見正己

発掘調査作業員

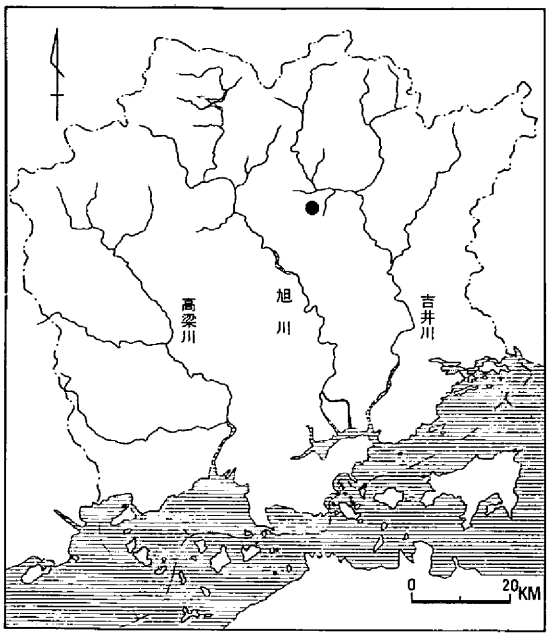
菅　猛，松田善平，松田ますよ，黒瀬きしよ，黒瀬律子，甲元寿恵

発掘調査にあたっては下記の方々から現地で有益なる御教示を得た。記して感謝の意を表します。

神原英朗（厚生小学校教諭），森田友子（久米レジャーランド内遺跡調査員），安川豊史（津山市教育委員会），行田裕美（津山市教育委員会），葛原克人（岡山県史編纂室），用田政晴（岡山県史編纂室）

また現地での連絡，調整等煩雑な仕事を引受けていただいた中央町教育委員会（杉山通夫教育長）の大天嘉行社会教育主事に感謝します。

第Ⅱ章　古墳の位置と歴史的景観



第１図　塚の前古墳の位置

古墳の位置

塚の前古墳は久米郡中央町打穴下に所在する。中央町は津山盆地の南西にあたり，町内から津山盆地に向って皿川と打穴川が流れており，町のほぼ中央を南から北へ流れる皿川にそって国道53号線と国鉄津山線が走っている。一方打穴川は町の西部を北に向けて流れ，久米町戸脇で倭文川と合流する。この打穴川流域に狭いながらも沖積地が形成され，その両側の丘陵緩斜面は開墾が進み小規模な棚田が発達しているが，塚の前古墳の所在する打穴下の地域では川の西側が開墾され，東側は山が急峻なことから開墾は進んでいない。

古墳は打穴川の西岸，西から東へ張り出した低丘陵の南斜面に位置する。開墾により墳丘は削平されているが，塚の前という小字名が古墳の存在を物語っている。

歴史的景観

塚の前古墳の所在する打穴川流域には古墳が点在するが，その西側に特に集中する。多くは後期の古墳と考えられるが，いくつかは時期の古いものも認められるようである。しかしその実態は不明な点が多い。町内で前半期の古墳と考えられるものは皿川流域にある諏訪神社古墳群で，変形獣形鏡などが出土しているが，打穴川流域では塚の前古墳の西方にある共栄古墳と鬼山３号墳はその可能性がある。いずれも一辺15m前後の方墳とされている。その他の多くは後期古墳と思われ，打穴川下流の西側には兼藤古墳群が，その東側には大平古墳群が認められる。塚の前古墳の上流西側には鬼山古墳群，カタ割塚古墳群，長者面古墳群がある。これより上流の打穴西にも群集はしないが，点々と後期古墳が所在する。

塚の前古墳の周辺では西側の丘陵上に焼寺古墳群がある。１号墳は直径13m前後の円墳であるという以外は不明である。２号墳は墳丘の直径17mの円墳で内部に横穴式石室を有する。すでに石室は開口しており，現存長7.5m，幅2.2mを測り，この地域では大きい方に属する。大圓寺古墳は塚の前古墳の北方にあり，横穴式石室を内部主体とする直径約13m前後の円墳である。

さて以上の古墳に埋葬された被葬者の集落であるが，打穴川流域ではまだ未発見であり，その関係は今後の課題となるであろう。

4．大圓寺古墳　5．兼藤古墳群　6．共栄古墳

7．鬼山3号墳(鬼山古墳群・長者面古墳群・カタ割塚古墳群)

8．三つ塚古墳群　9．大平古墳群

第2図　塚の前古墳周辺の古墳分布図（S＝$\frac{1}{25000}$）

第Ⅲ章　調査の経過

調査は1980年12月８日より開始した。まず石室の主軸方向を確認するため，水田法面に一部露呈していた側壁を中心に，ほぼ南北に側壁上端部を確認しつつ掘り広げていった。石室主軸確認後，主軸線上にＳ，Ｎ1，Ｎ2のポイントを，これに直交する線上にＷ，Ｅのポイントを設定し，その交点をＯポイントとした。レベルは海抜高度の測点が周辺に所在しないことから，仮にＯポイントを基線にした。

各基準杭の設定後石室内の掘り下げを行い，その後墳丘・周溝の調査を目的に，主軸線に接してＮトレンチと，ＷＥ線に接してＷトレンチ，さらにその間にＮＷトレンチを設定し調査を進めた。その結果直径約13ｍの円墳で，横穴式石室を内部主体とする６世紀末から７世紀前半の古墳であったことなどが明らかとなり，1981年１月12日をもって調査を終了した。

調査日誌

1980年12月８日，調査開始。調査前の写真撮影後，石室側壁上端部まで掘り下げを行う。

９日　石室側壁上端部をすべて検出し，南に開口する石室であることを確認。測量基準杭を設定。

10日　地形測量を行う。石室内を掘り下げ２基の陶棺を確認，奥より１号，２号陶棺とする。

11日　石室内掘り下げ。２号陶棺の前にさらに陶棺が検出され，３号陶棺とした。

15日　石室内掘り下げ。１号陶棺周辺より副葬品の須恵器が検出される。

16日　石室内掘り下げ。ほぼ床面に近い所まで検出する。

17日　石室内副葬品の検出。概して副葬品は少ない。

18日　石室と副葬品出土状態の写真撮影。墳丘と周溝を確認するためＮ，Ｗトレンチを設定。

19日　副葬品の遺物分布図作成と取り上げを行う。Ｎ，Ｗトレンチは掘り下げ完了し，Ｎトレンチでは周溝，Ｗトレンチでは石室掘方と墳丘残存部を確認した。１号陶棺実測。

22日　２・３号陶棺実測。３号陶棺取り上げを行う。ＮＷトレンチを設定する。

23日　ＮＷトレンチ掘り下げ完了。周溝が検出された。昼より雨のため作業中止。

24日　２号陶棺内掘り下げを行い，耳環１個を検出。石室実測用割付を行う。

25日　１号陶棺内掘り下げ。２号陶棺南半分を取り上げ。石室平面実測。

26日　１号陶棺内副葬品検出。写真撮影後遺物分布図を作成。Ｗトレンチ断面図作成。

1981年１月６日　周溝平面図作成。石室内の清掃。

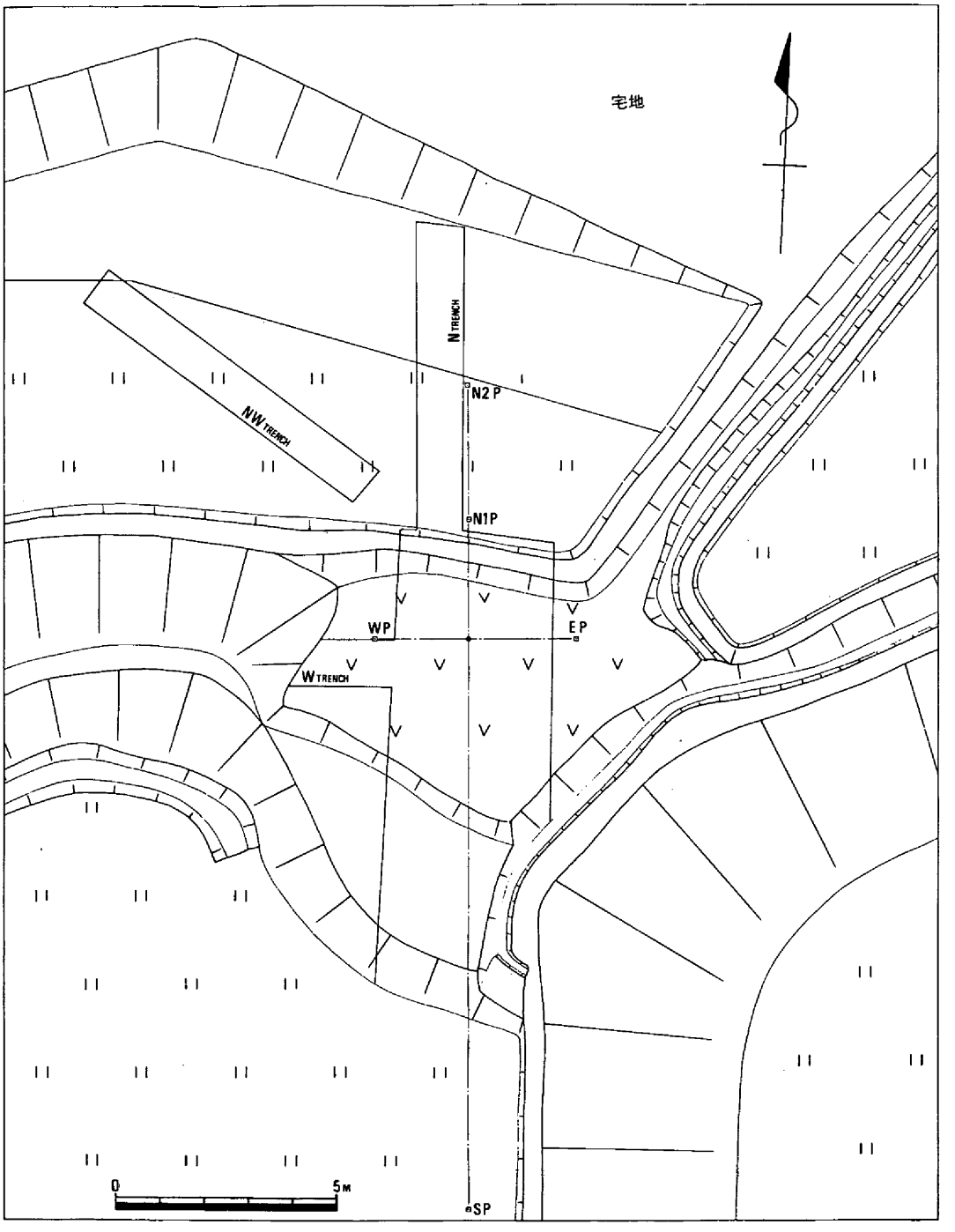
７日　専門委員会開催。石室平面図完了。

８日　１・２号陶棺を取り上げ，中央中学校へ運搬する。

９日　石室の側壁実測。

12日　Ｎ，ＮＷトレンチ断面図作成。石室縦横断面図作成。

13日　完掘後の全景写真を撮影して調査を終了する。

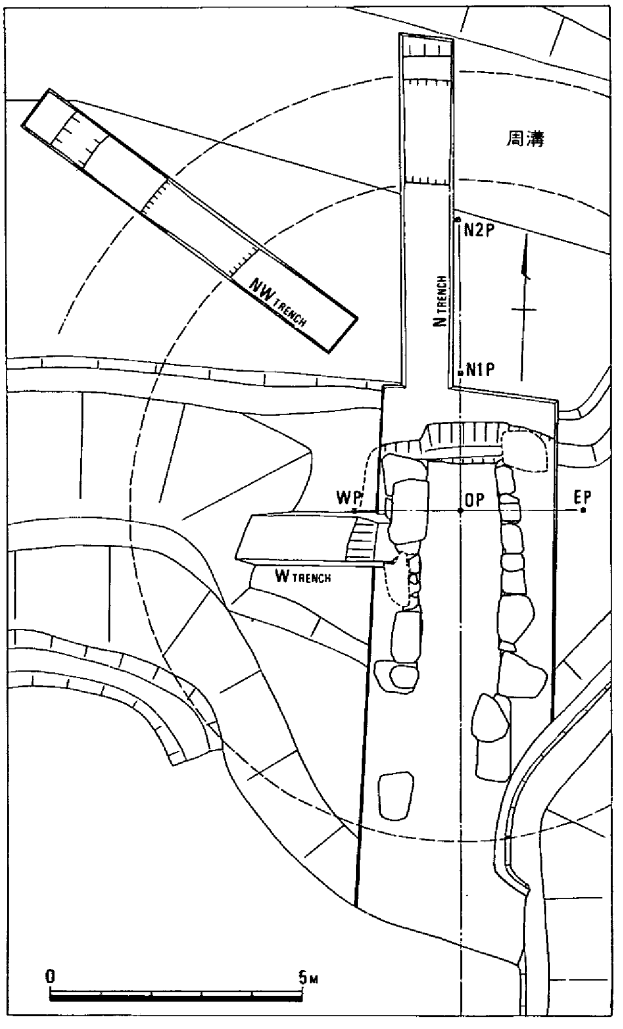


第３図　古墳測量図（S＝$\frac{1}{150}$）

第Ⅳ章　古　　墳

第1節　墳丘・周溝

墳丘および周溝についてはN，NW，Wのトレンチで確認をした。Nトレンチでは，南端の石室掘方に近い場所で黄褐色，暗褐色の盛土が認められたが，その他は耕作土直下は地山となり，かなりの削平をうけていることが判明した。周溝については僅かにその痕跡が北端に近い場所で確認された。幅2.2m深さ0.2mを測り，内部には墳丘盛土と同じ暗黄褐色土が埋まっていた。なおトレンチ北端の溝は新しいものと考えられる。

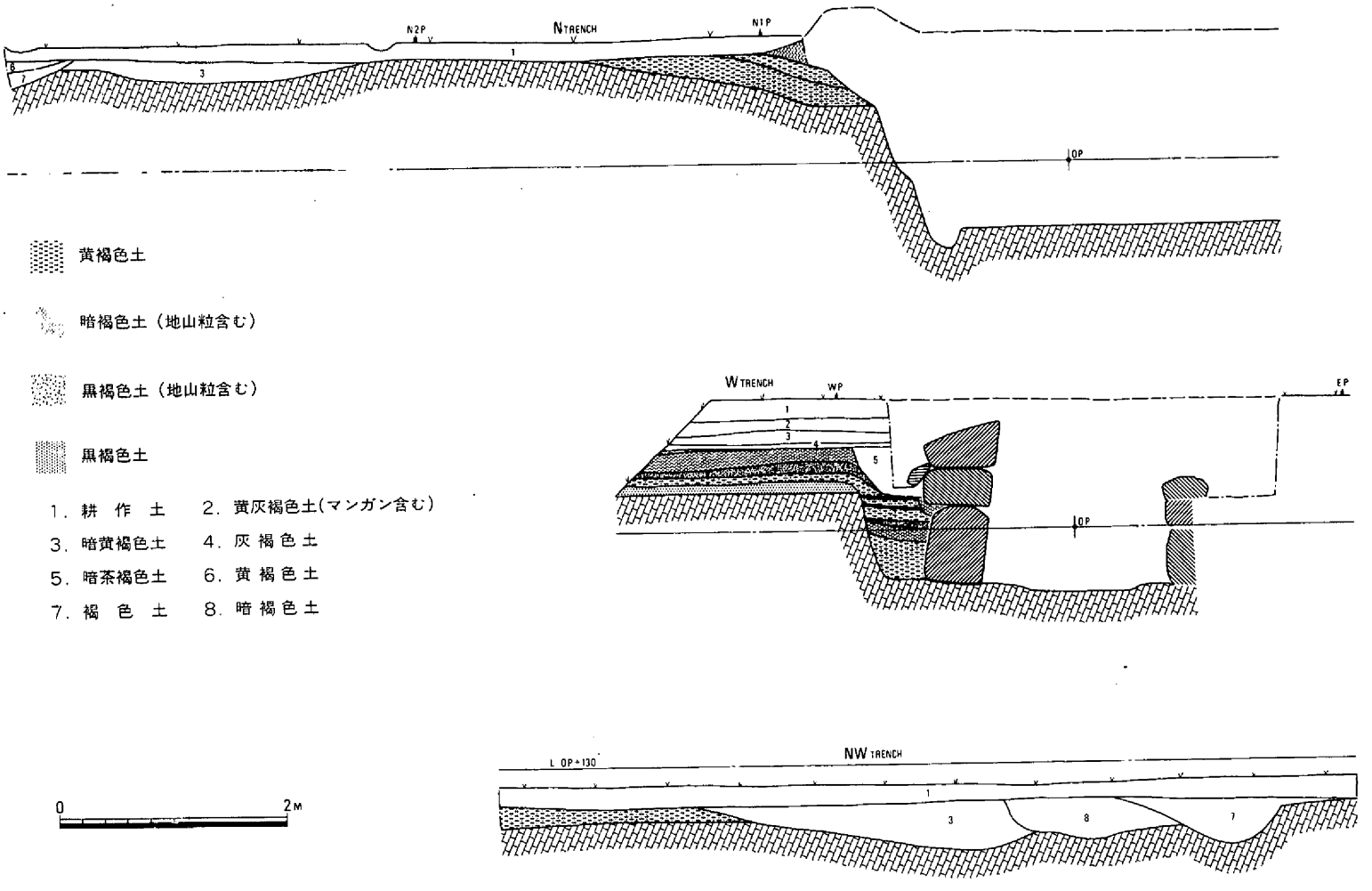


第4図　トレンチ平面図（S＝$\frac{1}{150}$）

NWトレンチにおいても石室に近い場所では黄褐色の墳丘盛土が認められ，それに幅約2.5m，深さ0.4mの周溝がつづく。周溝内には墳丘盛土と同じ暗黄褐色土が埋まっており，その北西には新しい掘り込みが，さらにその北西端にも溝が掘られている。

Wトレンチでは石室掘方と墳丘盛土が確認された。石室掘方は石室の側壁に平行して掘られ，その間隙は約0.6mを測り，版築状に土が埋められたことが観察される。墳丘盛土は側壁の三段目ぐらいまで残存しており，それより上は何回かの造成により墳丘がおおわれているが，この造成前に側壁の2段目に達する穴が掘られている。

これらのことから古墳の規模は第4図に示すごとく山側に約2.5m前後の周溝を有する直径約13mの円墳であったことが推定される。

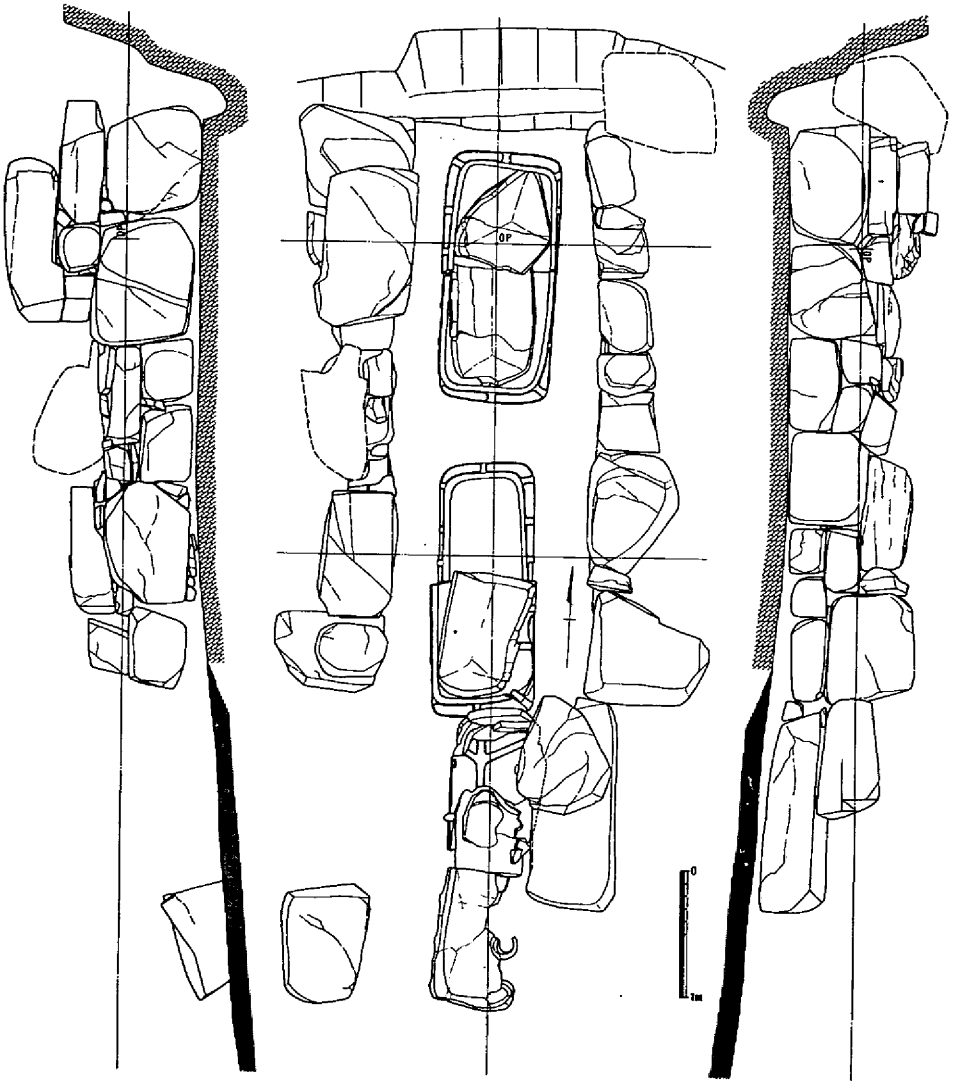


第5図　トレンチ断面図（S＝$\frac{1}{80}$）

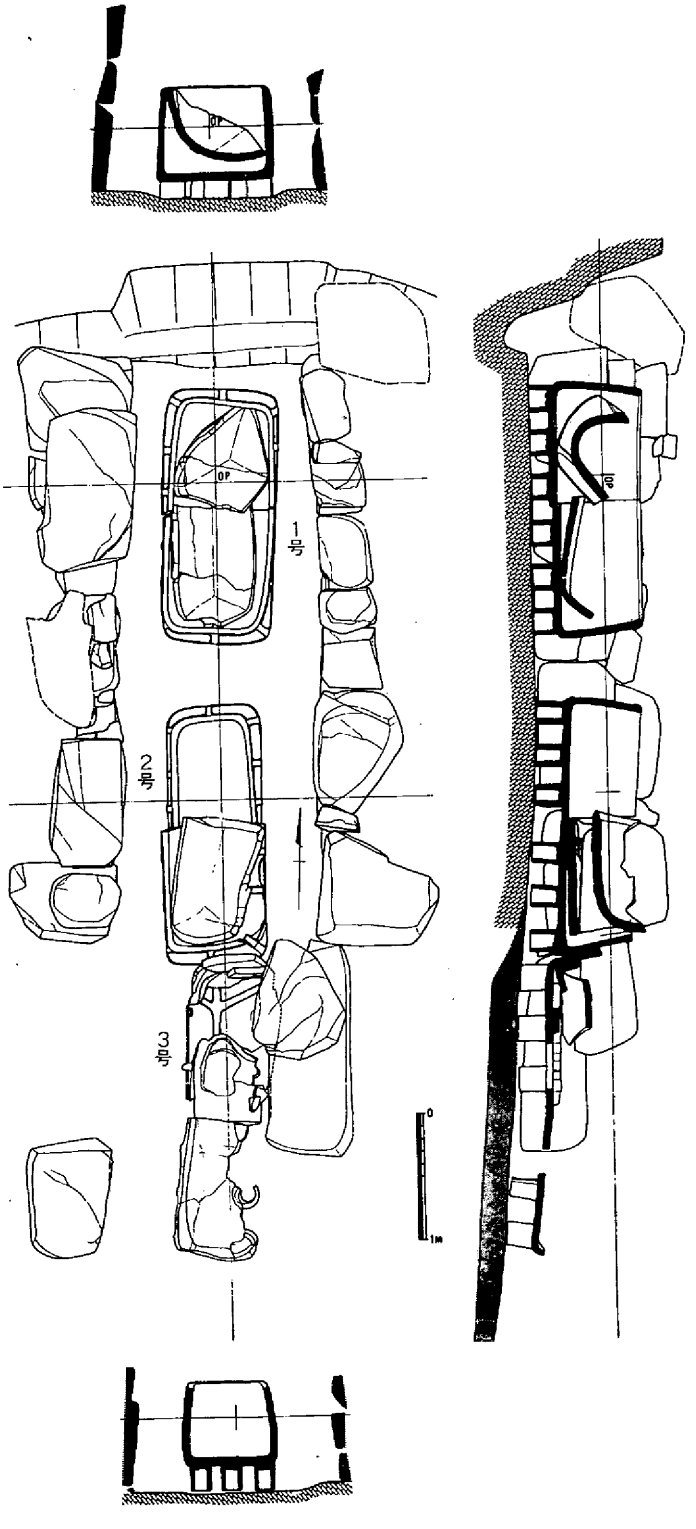
第2節　横穴式石室

横穴式石室の掘方

石室は地山を掘り込み，その中に構築しており，奥壁部と西側の側壁部で部分的に掘方が確認できた。奥壁部では掘方は奥壁に合わせて広く掘られている。奥壁東側の掘方は奥壁抜き取時に掘削されて広くなっているが，本来は西側と同じように側壁の最奥部の石とあまり間隙のない程度であったものと考えられる。側壁部の掘方はやや広めに掘られており，石を積んでは土を入れて固めたことが観察される。



第6図　横穴式石室実測図（S＝$\frac{1}{60}$）



第７図　陶棺出土状態（Ｓ＝$\frac{1}{60}$）

横穴式石室

石室は残存部で全長約7ｍ，幅1.65ｍを測り，南に開口する無袖のやや胴張りを呈する横穴式石室である。奥壁は抜き取られ，天井石も開墾時に持ち去られたものと思われる。なお石室入口東側寄りに天井石と考えられるものが１枚転落して埋まっていた。

側壁は東側の奥側では３段目，入口側では２段目まで残存していた。積み方は下段は広口積，２・３段目は横口積みとなっている。なお入口側の石が石室内に寄っているのは開墾時に外側より押され，上側が内傾したためであり，袖石ではない。西側の側壁は奥壁に近い場所で3段目まで，入口に近い所では２段，あるいは基底部しか残存していない。石積みは下段は広口積，２・３段目は横口積みが多い。

石室床面は石室内の大部分が直接地山面を利用し，ほぼ水平であるが，入口近くでは地山上に堆積している黒褐色土が床面となり，ここを境として入口に向ってしだいに下がっていく。また横断面で見た場合中央部の陶棺設置部は一段低くなっている。

第3節　陶　　棺

A　1号陶棺（第8図）

1号陶棺は石室の一番奥部に埋置されていたもので，検出時には身が完存し，蓋も大破片のまま身の中へ落ち込んでいたが，取り上げの段階で底部および脚部は壊れてしまった。特に脚部は粘土化していたことから復元にあたっては困難を極めたが，ほぼ完形に復元することができた。

陶棺は土師質の亀甲形で全長2.00m，幅0.93m，高さ1.21mを測る。脚は高さ15cm前後，径21cm前後の円筒を呈し，6本づつ3列に配されている。外面は刷毛調整，内面はナデ，下端は横ナデにより仕上げられる。

身は隅丸長方形の箱形を呈するが，上端は下端より狭くなっている。外面には低くて幅広い凸帯が上・下端にめぐり，これを区画するように縦に凸帯が貼り付けられる。この縦の凸帯は脚の位置と合わせられ，さらに蓋の凸帯とも正合する。内面の底部は平坦で外口側に2個所小円孔が穿たれている。壁の厚さは4～5cmで，上端面にはヘラによる切断痕跡が著しく認められ，内面にはヘラ先で押し出された粘土が若干張り出して残っている。調整は内面が丁寧なナデにより仕上げられ，外面は刷毛調整後ナデによって仕上げられたものと考えられる。

蓋はカマボコ状を呈する。下端には凸帯がめぐり，稜線上にも外口側の突起まで貼り付けられ，その間を区画するように縦方向に格子目の刻まれた凸帯が貼り付けられる。この凸帯の区画内に6対の突起が配される。突起は先端部が細くやや下がりぎみの棒状を呈し，壁に差し込まれている。受け部と重ね部には木葉痕跡が認められ，図示したような粘土接着面が観察される。調整は外面については身と異なるものではないと考えられる。内面は突起のやや上部までが丁寧なナデにより仕上げられるが，これより上部はやや雑となり，中央部の稜線近くでは指頭による圧痕や，板による押えつけ痕などが残り凹凸が著しい。

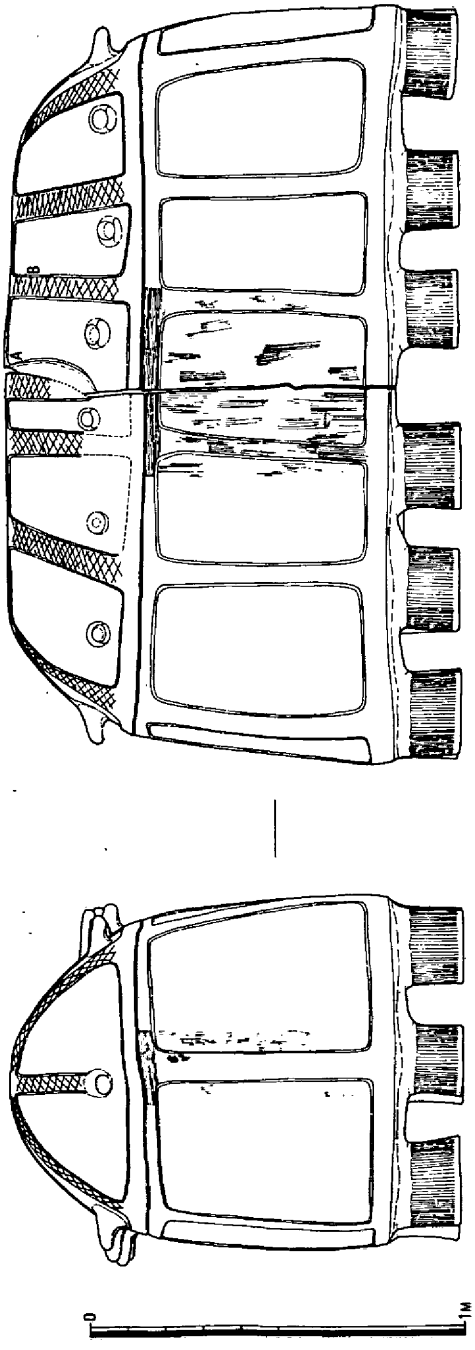
B　2号陶棺（第9図・10図）

2号陶棺は1号陶棺の前に約50cmの間隔をおいて埋置されていた。検出時は身の奥半分が完存し，前半分も壁が一部壊れてはいたがほぼ完存した。蓋は半分が身の内部に落ち込んでいた。取り上げの段階で前半分の脚は粘土化が著しく進行していたため細片となってしまったが，奥半分はそのまま取り上げた。したがって復元にあたっては脚の半分をセメントでつくったが，身はほぼ完形に，蓋も半分は復元することができた。

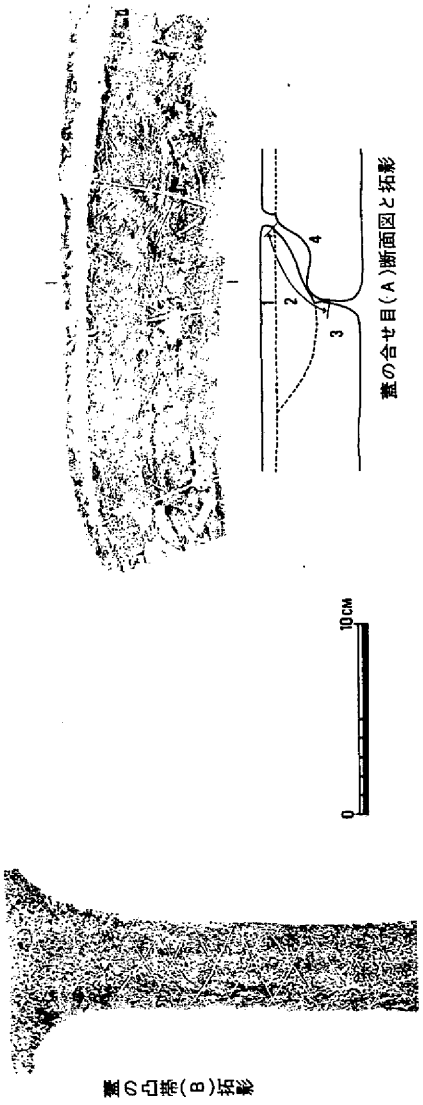
陶棺は土師質の亀甲形で，全長2.04m，幅0.78m，高さ1.17mを測る。色調は赤褐色を呈し，胎土には砂粒を多く含む。

脚部は高さ17cm前後，径20cm前後の円筒を呈し，6本ずつ3列に配されている。脚と身の底部との接合部を観察すると図のような粘土接合面が認められた。円筒の脚は上端部でやや広がり，その上に

7の粘土帯を他の脚上端部も覆う程度の幅でめぐらし，その下に脚上端部の接合を補強するため8，9の粘土がめぐらされ，10の粘土で仕上げをおこなう。最後に5の粘土を詰めて平坦な底部が完成すると考えられるが，6の粘土については観察が十分でないが，脚の内部から脚上端を補強するものと



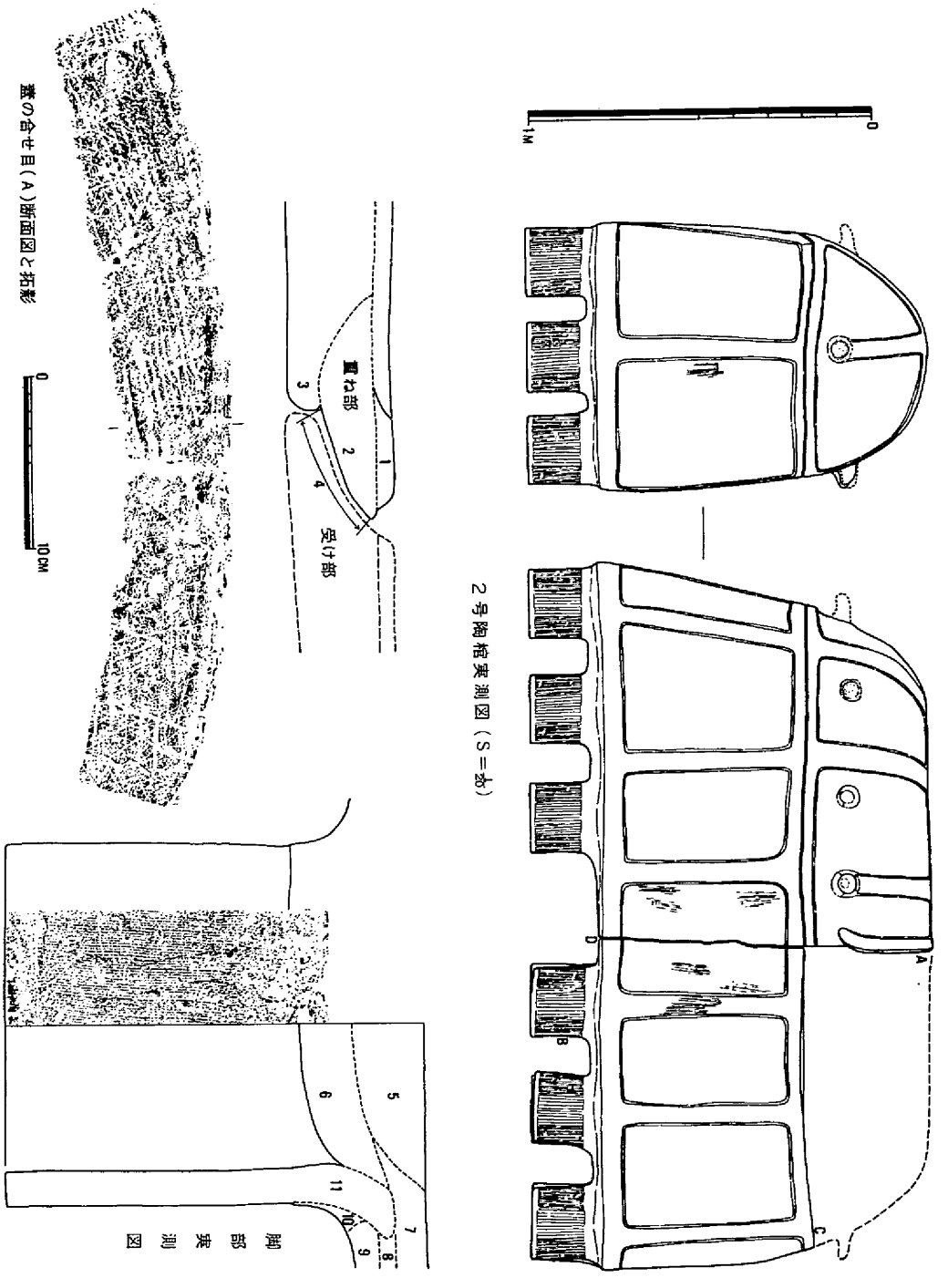
1号陶棺実測図（S＝$\frac{1}{20}$）



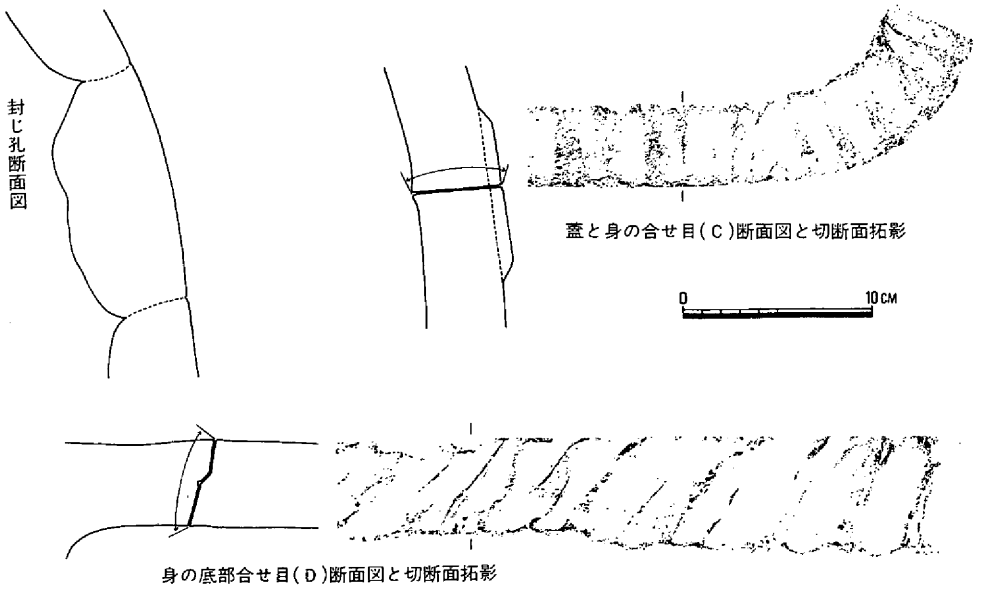
第8図　1号陶棺実測図

思われる。調整は外面が刷毛，内面はナデ，下端は横ナデによって仕上げられる。

身は隅丸長方形を呈する箱形で，上端は下端より狭くなる。外面には低くて幅広の凸帯が下端と上



第9図　2号陶棺実測図(1)



第10図　2 号 陶 棺 実 測 図 (2)

端にめぐり，その間にも長方形に区画するように凸帯が貼り付けられる。この凸帯は約20cm単位の粘土帯で，壁との接合部には線刻が施される。調整は外面が刷毛調整後ナデ，内面は丁寧なナデが認められる。

蓋はカマボコ状を呈する。下端には凸帯がめぐり，稜線上も外口の突起まで凸帯が貼りつけられる。稜線上の凸帯と下端の凸帯を結ぶ凸帯はほぼ身の凸帯と正合するが，一本だけは突起に接続する。蓋中央の重ね部には荒いカキ目が認められ，その上に木葉痕跡が残る。調整は外面をナデ，内面は突起のやや上までは横方向のナデで，それより上は指頭圧痕などの凹凸でやや雑な仕上りとなる。

身や蓋の切断面にはヘラ切り痕が顕著に残っている。特に身の底部には内から外に向けて突き差すようにして切断したと考えられる痕跡が認められる。

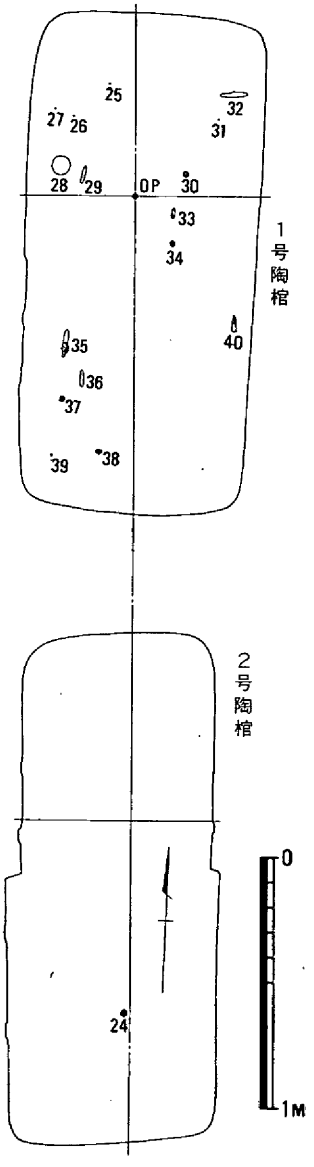
C　3号陶棺

3号陶棺は石室入口に近く，2号陶棺に接して埋置されていた。開墾により2号陶棺に近い部分は身が押し潰され，その上に蓋が一部残存していたが，石室入口に近い方は身の底部しか残っていなかった。さらに全体が粘土化していたことから，取り上げの段階で接合不可能なまでの細片となってしまった。しかし，検出時の所見をもとに全体を推定すれば，製作技法については，1号・2号陶棺と何ら異なる点は認められないようである。

陶棺は土師質の亀甲形で，色調は赤褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含む。推定全長2.30m，幅0.60mを測る。脚は高さ15cm前後，径20cmの円筒を呈し，6本ずつ2列に配されていたものと推定される。

第4節　副　葬　品

A．陶棺内の副葬品



第11図　陶棺内遺物分布図

1号陶棺（第11図）

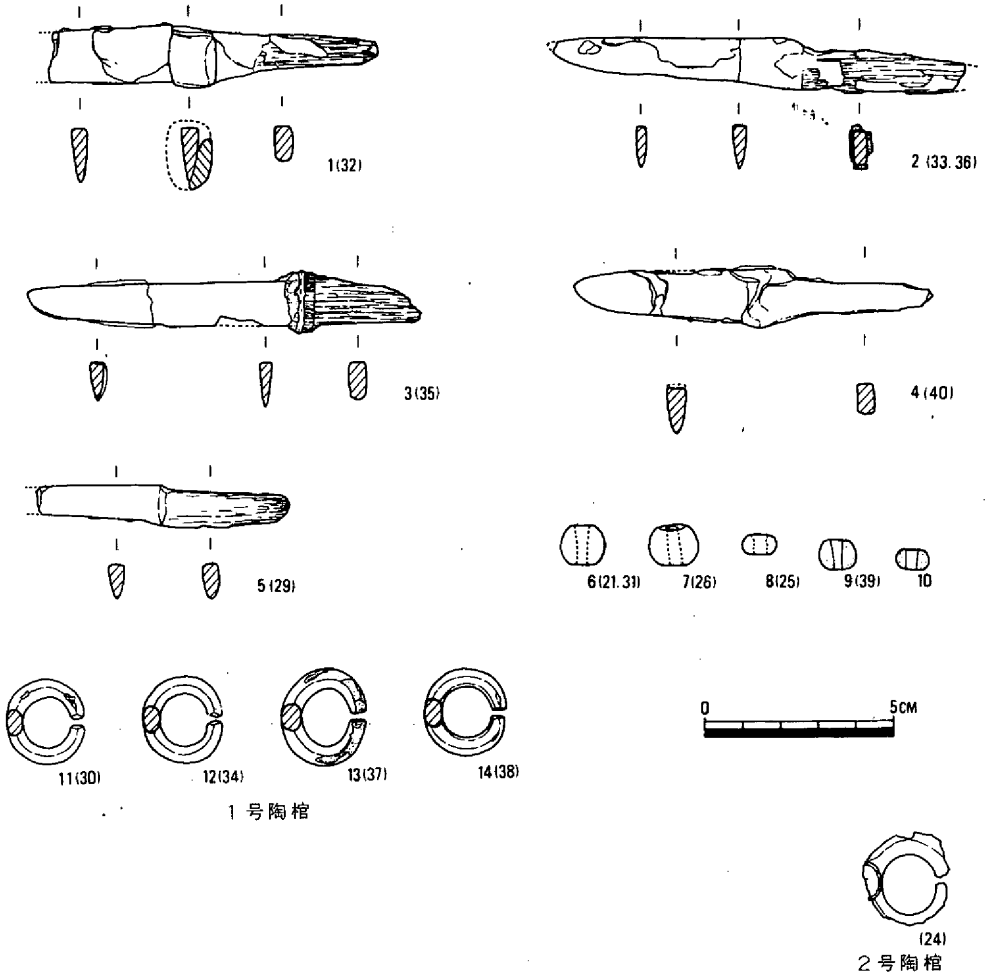
出土状態　1号陶棺は身が完存しており，その中に蓋が逆様に落ち込んでいた。この落ち込んだ蓋の下から中世の小皿が一点出土していることから，確実にこの段階で棺内が荒らされている。したがって副葬品のすべてが原位置ではないが，ある程度の配置を推定することが可能である。

まず耳環が北側に一対（30・34）と南側に一対（37・38）あることから二人の埋葬が推定される。北側の被葬者に近い位置にあるものとしては29・32・33の刀子，そして25・26・27・31の玉である。しかし33の刀子と南側の被葬者に近い位置にある36の刀子は接合し，さらに玉についても散在していることからかなり移動しているものと考えられる。南側の被葬者に近い位置にあるものは35・36・40の刀子と39の玉である。

副葬品（第12図）

刀子（1～5）　1号陶棺内からは5本の刀子が出土した。1は刃部より切先までを欠いている。残存部の長さ88mm，刃幅14mm，厚さ4mmを測る。茎には木質が若干残存し，関部には責金具が残る。2は茎の先端と切先を若干欠く。残存部の長さ110mm，刃幅10mm，厚さ4mmを測る。茎には木質が残存する。3は完存し，全長106mm，刃幅12mm，厚さ4mmを測る。茎には木質が残存し，関部には幅4mmの責金具が認められる。4は茎の端部を若干欠いている。残存部の長さ95mm，刃幅14mm，厚さ5mmを測る。両関であるが，背関には2mmの段がつき，刃関は少しずつ幅を減じてゆく。5は頻繁な使用により刃部が細くなっている。残存部の長さ68mm，刃幅9mm，厚さ4mmを測る。茎には木質が残る。

玉（6～10）　すべてガラス製で6個出土したが，1個は風化が著しく粉末化したため図示できなかった。6はほぼ半分に割れて出土したものを接合した。径12mm，厚さ10.5mmを測り，中央に一方向より穿孔がなされる。表面の風化はほとんど認められず，色調は濃い緑を呈する。7は完形品で，径13.5mm，厚さ10.5mmを



第12図　陶棺内の副葬品〈(　)内は遺物分布図の番号〉

測る。表面は風化して白くなっている。色調は淡青白色を呈する。8は完形品であるが，風化が著しく表面は白くなっている。色調は淡青白色を呈する。9は半分しか残存せず，色調は濃い緑を呈する。10も半分残存するのみで，風化が進行している。色調は黄白色を呈する。

耳環（11～14）　4個出土しており，14は銅地金張り，それ以外は銅地銀張りと考えられる。11は径22㎜のほぼ正円を呈し，断面は楕円形で長径7㎜，短径4㎜を測る。12は11と同様の規格を示す。13は長径26㎜，短径23㎜のやや楕円形を呈し，断面も長径7㎜，短径5.5㎜の楕円形をなす。14は径22㎜のほぼ正円形を呈し，断面は長径7㎜，短径5㎜の楕円形をなす。

2号陶棺（第11図）

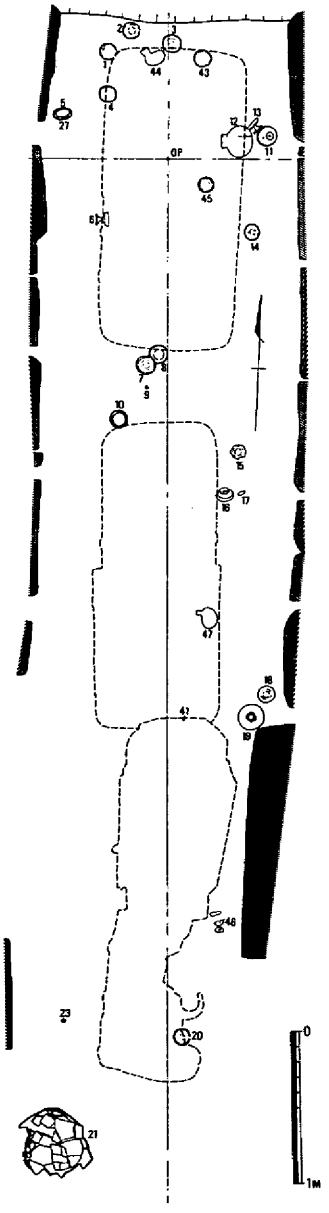
出土状態　2号陶棺は身の北側は完存していたが，南側は東壁が内に倒れており，その上に蓋が逆に落ち込んでいた。副葬品はこの南側の床面に接して耳環が1個出土したのみである。

副葬品（第12図）

耳環　腐蝕が著しく外周は欠いている。銅地銀張りで，径24mm前後の正円形を呈するものであったと推定される。

B．石室内の副葬品

副葬品の出土状態（第13図）



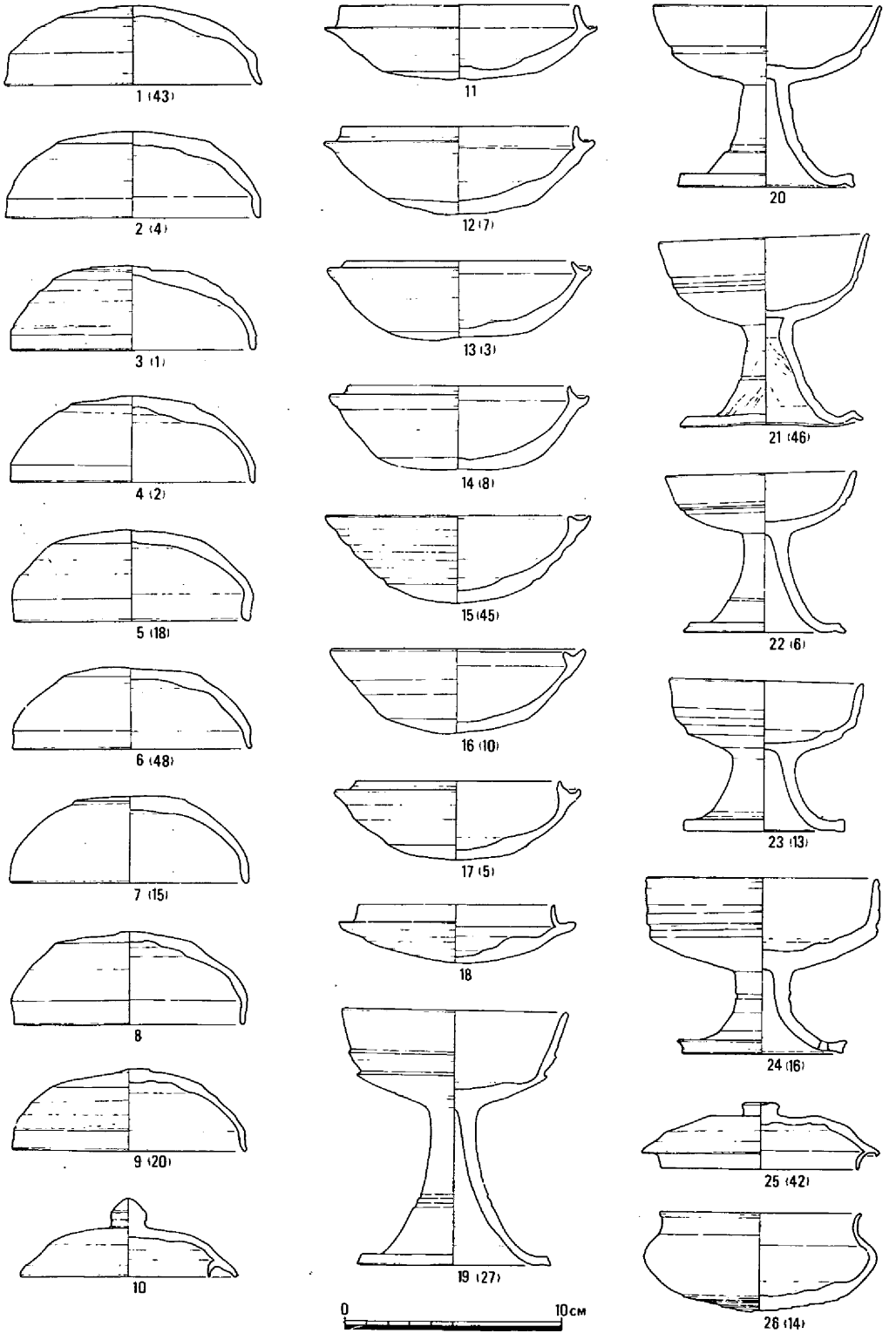
第13図　石室内遺物分布図

石室は開墾により奥壁や天井石などが抜き取られてはいるが，陶棺の身が完存し，かつまた，石室の側壁が陶棺の身の高さまで残存していることから，陶棺の身に達するまでの掘り下げはなかったようである。石室内の埋土を見ると陶棺の身直上までは黄褐色土と暗褐色土が複雑に混在した土が認められ，さらに陶棺の身上端より約20cm下までは暗茶褐色土が堆積し，その中には中世の土器が認められた。これより下は床面まで暗褐色土が堆積していたが途中に遺物はなく，大部分の副葬品は床面に接して出土した。ただ９と23の耳環は床面より約10cm浮いて出土したことから陶棺内のものが移動したと考えられないこともないが，少なくとも２号陶棺の位置までは中世以後になって床面にまで達するような掘り下げはなかったと判断される。

石室入口に近い３号陶棺は調査前まで耕運機に当っており，かつ側壁もほとんど抜き取られていることから陶棺の身底部まで撹乱は達していた。したがって３号陶棺周辺部の副葬品については持ち去られているものも少なくないと考えられる。以上のような状況ではあるが一応出土状態を略述しておく。

まず１号陶棺周辺であるが，奥壁の抜き取りによる撹乱は１号陶棺と奥壁の間隙には達しておらず，須恵器の杯身・蓋（３・２）が認められた。東側には須恵器の高杯（13）が台付平瓶（11）に接し，その南に短頸壺（14）があった。西側は須恵器の杯蓋（５）と，その下から高杯（27）の杯部が出土したが，高杯は２号陶棺西側で出土した脚部と接合した。陶棺下，あるいは陶棺の足と足の間に置かれている須恵器も多く，杯蓋（４），高杯（６），平瓶（44），杯蓋（43）などは足と足の間にうまくはめこんでおり，かなり奥まで入れた杯身（45）もある。土師器の壺（12）も横にして押し込められている。

１号陶棺と２号陶棺の間にも耳環（９）と須恵器の杯身（７・８・10）よりなる一群の副葬品がある。２号陶棺の東側では須恵器の杯蓋（15・18），高杯（16），台付長頸壺（19）と鉄鏃が出土



第14図　石室内の副葬品(1) <(　)内は遺物分布図の番号>

し，陶棺の足間には平瓶（47）がある。

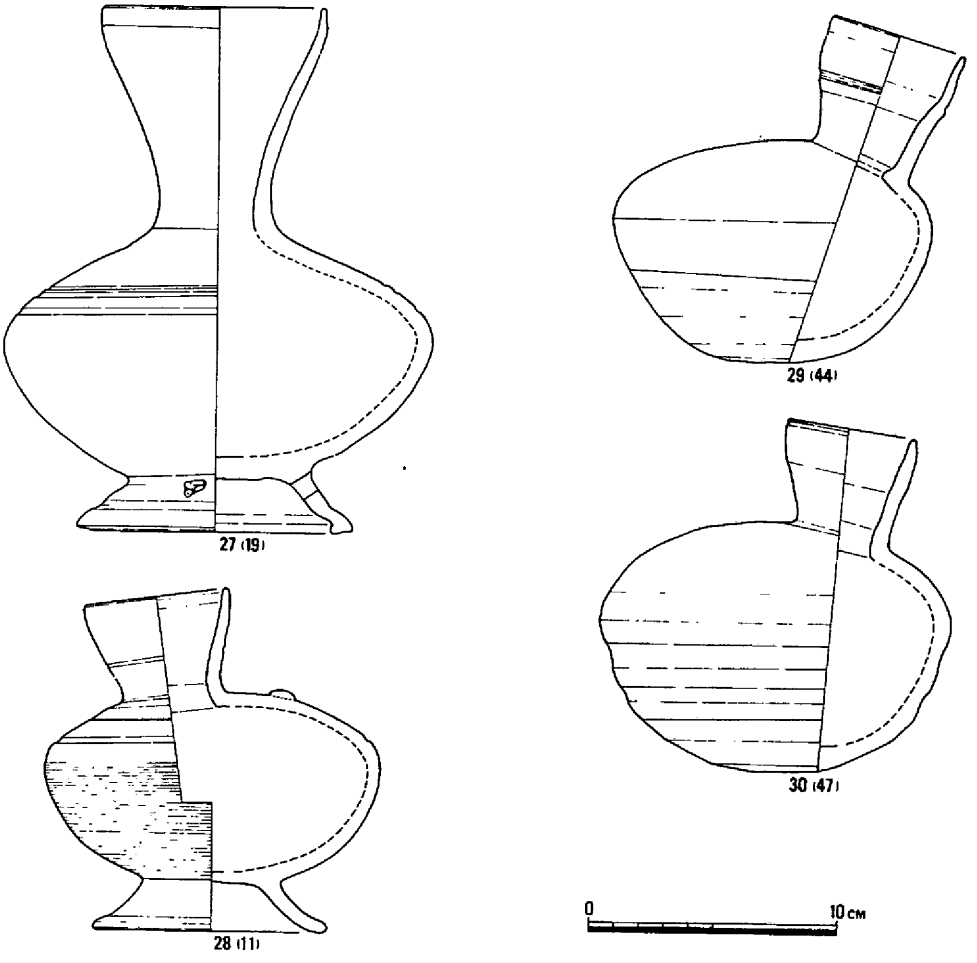
3号陶棺東側では須恵器の高杯（46）と，陶棺の足間から杯蓋（20）が出土した。西側では耳環（23）が認められ，さらに南の石室入口と考えられる所に大甕が置かれていた。

副葬品（第14図～18図）

須恵器（第14図～16図）

須恵器は図示した31個体以外に，小破片の存在からさらに数個体が副葬されていたと考えられる。多くのものは床面から完形，あるいは完形に近い形で出土しており，その位置は分布図に示し，土器番号の後に（ ）で示してある。（ ）の番号がないものは床面より遊離して出土したもので，破片となっているものが多かった。

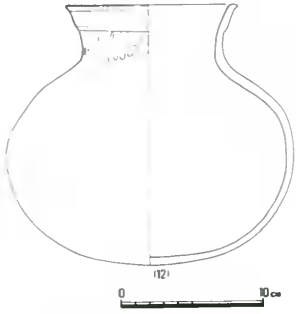
杯蓋（1～10）　杯蓋は10個体出土した。1は丸みをもつがやや偏平な外観を呈する。口縁部は天井部から外反ぎみに屈曲し，にぶい稜線をつくる。調整は天井部をヘラ切り未調整，その他は横ナデ



第15図　石室内の副葬品(2)

第16図　石室内の副葬品(3)

を施している。2はやや平坦な天井中心部から急斜で口縁部に至る。口縁部は屈曲して垂下し，そこににぶい稜線をつくる。調整は天井部2分の1をヘラ切り未調整，その他は横ナデによって仕上げている。3は平坦な天井中心部より急斜で口縁部に至る。口縁部は若干屈曲して垂下し，端部は丸くおさめる。調整は天井部2分の1をヘラ切り未調整，その他は横ナデにより仕上げる。4は天井中心部がやや平坦であるが，半球状の外観を呈する。口縁部は急斜な天井部から屈曲して垂下し，そこににぶい稜線をつくる。調整は天井部2分の1をヘラ切り未調整，その他は横ナデを施す。5はやや平坦な天井中心部



第17図　石室内の副葬品(4)

表1　副葬品須恵器計測表

番号	器種	残存	口径	最大径	器高	色調	胎土	焼成	ロクロ回転
1	杯蓋	完形	11.8		3.6	暗青灰色	砂粒多く含む	良好	左方向
2	杯蓋	完形	11.7		3.9	淡灰色	黒色半溶解物質多く含む	良好	左方向
3	杯蓋	完形	11.3		3.8	淡灰青色	黒色半溶解物質，細砂粒含む	良好	左方向
4	杯蓋	完形	11.2		3.9	青灰色	2㎜前後の砂粒多く含む	良好	
5	杯蓋	完形	10.9		4.2	青灰色	黒色半溶解物質と砂粒多く含む	良好	
6	杯蓋	1/3残	11.0		3.7	青灰色	黒色半溶解物質含む	良好	
7	杯蓋	1/3残	11.0		3.9	青灰色	砂粒多く含む	良好	
8	杯蓋	完形	10.5		4.2	青灰色	白色砂粒含む	良好	
9	杯蓋	完形	10.8		3.7	灰青色	黒色半溶解物質，細砂粒含む	良好	左方向
10	杯蓋	1/4残	7.4	10.0	3.6	青灰色	細砂粒若干含む	良好	
11	杯身	1/2残	11.0	12.5	3.4	暗青灰色	白色砂粒含む	良好	
12	杯身	完形	10.8	12.4	4.0	淡灰色	黒色半溶解物質含む	良好	左方向
13	杯身	完形	10.4	12.1	3.6	青灰色	黒色半溶解物質，細砂粒含む	良好	
14	杯身	完形	10.2	11.9	3.8	淡灰色	黒色半溶解物質含む	良好	右方向
15	杯身	完形	10.2	12.2	4.0	暗灰色	白色砂粒多く含む	良好	
16	杯身	完形	10.0	11.8	3.9	青灰色	砂粒多く含む	良好	
17	杯身	完形	9.3	11.3	3.6	淡灰色	細砂粒含む	良好	
18	杯身	1/2残	9.0	10.9	2.6	淡青灰色	細砂粒若干含む	良好	
19	高杯	3/5残	10.4		11.6	淡灰色	黒色半溶解物質，細砂粒含む	良好	
20	高杯	4/5残	10.4		8.2	灰茶褐色	細砂粒若干含む	良好	
21	高杯	1/2残	9.5		8.7	淡灰色	細砂粒含む	良好	右方向
22	高杯	完形	8.7		7.3	淡灰色	黒色半溶解物質，砂粒含む	良好	
23	高杯	完形	8.8		6.9	青灰色	砂粒多く含む	良好	
24	高杯	完形	10.6		7.9	灰茶褐色	白色砂粒含む	良好	
25	蓋	完形	9.0	10.8	3.0	青灰色	白色砂粒含む	良好	右方向
26	短頸壺	完形	9.2	10.6	4.4	青灰色	細砂粒多く含む	良好	左方向
27	長頸壺	4/5残	8.8	17.0	20.8	暗紫灰色	砂粒多く含む	良好	
28	平瓶	完形	5.6	13.2	13.5	灰白色	砂粒多く含む	良好	
29	平瓶	完形	5.4	12.8	13.8	淡灰色	白色砂粒含む	良好	右方向
30	平瓶	完形	5.2	14.0	14.0	淡灰色	黒色半溶解物質，白色砂粒含む	良好	
31	甕	4/5残	22.4	46.5	47.8	暗青灰色	砂粒含む	良好	

表2　副葬品土師器計測表

1	壺	4/5残	12.1	20.2	18.2	赤褐色	細砂粒多く含む	良好	

から急斜で口縁部に至る。口縁部との境界はややふくらみをもち，口縁部は内彎ぎみに垂下する。調整は天井部の２分の１をヘラ切り後不規則なナデ，天井内面中心部は不規則なナデ，その他は横ナデによって仕上げられている。６はやや平坦な天井中心部から急斜に口縁部に至る。口縁部は屈曲して垂下し，そこににぶい稜線をつくる。口縁部外面は強い横ナデにより浅い凹部をもち，端部はやや外反ぎみとなり，尖りぎみに丸くおさめる。調整は天井部２分の１をヘラ切り未調整，その他は横ナデにより仕上げている。７は天井中心部が平坦であるが，半球状の外観を呈している。天井部と口縁部の境は明瞭でなく，口縁端部は丸くおさめる。調整は天井部の２分の１はヘラ切り未調整，その他は横ナデを施している。８は天井中心部がやや平坦であるが，半球状の外観を呈する。天井部と口縁部の境界はにぶい稜線をもち，口縁部は内彎ぎみに垂下する。調整は天井部２分の１をヘラ切り未調整，その他は横ナデを施している。９は天井部が丸みをもち，口縁部との境界は明瞭でないが，口縁部は外反ぎみに屈曲して垂下する。調整は天井部の２分の１がヘラ切り未調整，天井内面中央部は不規則なナデ，その他は横ナデによって仕上げられる。10は宝珠つまみがつくもので，内面には短かいかえりが認められる。調整は天井部３分の２をヘラ削り，内面中央部は不規則なナデ，その他は横ナデにより仕上げられる。

さて以上の杯蓋は形態から分類すれば２類に分けられる。１類は１から９までのつまみの無いもので，外観は深みのあるボール状を呈し，口径11.8cmから10.8cmの小型品である。手法では天井部のヘラ切りが特徴としてあげられる。２類は10のみであるが，天井部につまみを有し，内面にかえりが認められるものである。

杯身（11～18）　杯身と考えられるものは８個体認められる。18については断定し得ないが一応ここに分類しておく。11は底部がやや平坦で浅い。たちあがりは短かく１cmを測り，やや内傾し，端部は丸くおさめる。調整は底部をヘラ切り未調整，内面中央部は不規則なナデ，その他は横ナデにより仕上げる。12は底部が深く丸みをもっている。受部はほぼ水平で，端部は丸くおさめる。たちあがりは上方に短かく，端部は丸くおさめる。調整は底部がヘラ切り未調整，その他は横ナデを施している。13は底部が深くやや平坦である。受部はやや深く端部は内彎ぎみにたちあがる。たちあがりは著しく内傾し短かい。調整は底部をヘラ切り未調整，その他は横ナデを施している。14は底部が平坦でやや深い。受部はやや深く，端部は内傾ぎみにつまみあげられる。たちあがりは内傾し短かい。調整は底部がヘラ切り未調整，その他は横ナデを施している。15は底部が丸く深い。受部は深く，端部は尖りぎみに丸くおさめる。たちあがりは受部と同じ高さで内傾している。調整は底部がヘラ切り未調整，内面中央部は不規則なナデ，その他は横ナデにより仕上げられる。16は底部が丸くて深い。受部は斜めにたちあがり端部は丸くおさめる。たちあがりは受部より低く内傾している。調整は底部がヘラ切り未調整，内面中央部は不規則なナデ，その他は横ナデにより仕上げている。17は底部が丸みをもち深い。受部は深く，端部は内傾ぎみにたちあがり丸くおさめる。たちあがりは著しく内傾し短かく，端部は尖りぎみに仕上げる。調整は底部をヘラ切り未調整，その他は横ナデを施している。18は底部が丸みをもち浅い。受部はほぼ水平に広くなり，端部はやや尖りぎみとなる。たちあがりは短かくやや内傾ぎみで，端部は尖りぎみに仕上げられる。調整は底部をヘラ削り，内面中央部は不規則なナデ，

その他は横ナデにより仕上げられる。

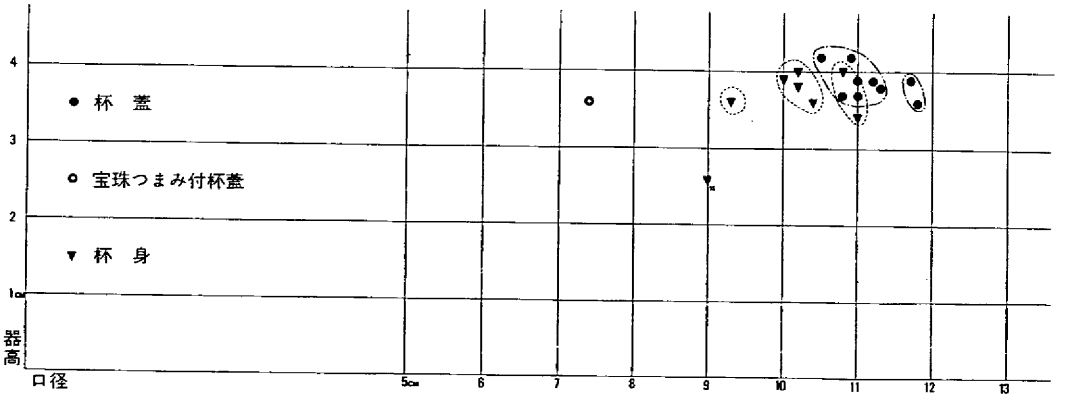
以上の杯身は18を保留すれば他はすべて底部が深く，口径が11cmから9.4cmと小型で，たちあがりは著しく内傾し短かい。手法も杯蓋の天井部と同じく，底部はヘラ切りが特徴的である。

高杯（19～24）　高杯は16個体が認められた。19は脚部が細くて長く，脚端にむかってラッパ状に開く。杯部はほぼ水平な底部から口縁部が外反ぎみに立ち上り，境界にはシャープな稜線が認められる。その上方にさらにもう一段稜線があり，口縁端部は丸くおさめる。調整は横ナデと考えられる。20は脚部が細く短かくなり，脚端にむかって開く。脚端は水平に開き端面には横ナデによる凹部をもつ。杯底部は丸みをもち口縁部との境に沈線がめぐる。口縁部は外反ぎみに立ち上り端部は丸くおさめる。調整はすべて横ナデと考えられる。21は脚部が細く短かく脚端にむかって開く。脚端は水平に開き端面には横ナデによる凹部がめぐる。内外面にはねじり上げたしわが認められる。杯底部は丸みをもち口縁部との境界に２本の沈線がめぐる。口縁部は外反ぎみに立ち上り端部は丸くおさめる。調整は全体を横ナデによって仕上げたものと考えられる。22は脚部が細く短かく脚端にむかってラッパ状に開く。脚端は水平に開き端面には横ナデによる凹部がめぐる。杯底部は丸みをもち，口縁部との境界に２本の沈線がめぐる。口縁部は外反ぎみに立ち上り端部は丸くおさめる。調整は全体に横ナデを施している。23は脚部が太くて短かく，脚端にむかってラッパ状に開く。脚端は水平に開き端面はやや丸みをもつ。杯底部は丸みをもち口縁部との境界に凹部がめぐる。口縁部はやや外反ぎみに立ち上り端部は尖りぎみに丸くおさめる。調整は杯部内面中央部が不規則なナデ，その他は横ナデによって仕上げられる。24は脚部が細くて短かく，脚端にむかって強く開く。脚端は水平に開き３個の円孔が穿たれる。杯底部はやや斜め上方に広がり口縁部との境界には凹部がめぐる。口縁部はほぼ垂直に立ち上り端部は丸くおさめる。調整は杯内面中央部が不規則なナデ，その他は横ナデによって仕上げられる。

蓋（25）　どの器種の蓋になるかは不明である。天井部に偏平なつまみがつき，内面にはかえりが認められる。調整は天井部がヘラ削り，その他は横ナデにより仕上げられる。

短頸壺（26）　やや偏平な胴部で，底部は丸みをもつ。頸部は外反ぎみに立ち上り，口縁端部は外反し尖りぎみに仕上げられる。調整は底部をヘラ削り，その他は横ナデによって仕上げられる。

表３　須恵器杯計測値分布表



長頸壺（27）　脚部は「ハ」字状を呈し，３個の円孔が穿たれる。胴部はタマネギ状を呈し，肩には２段に沈線がめぐりその間にカキ目が施される。頸部は開きながら立ち上り，口縁端部は丸くおさめる。調整は全体に横ナデが認められる。

平瓶（28～30）　平瓶は３個体出土したが，28は脚のつくものである。28は「ハ」字状に開く脚がつくもので，脚端部は丸くおさめる。胴部はやや偏平で肩部に沈線が２条めぐり，碁石状のものが１個貼り付けられる。口縁部は端部にむけて内彎ぎみに開く。調整は胴部下半はカキ目。その他は横ナデによって仕上げられる。29は丸みをもつ底部で，肩の張った胴部をもつ。口縁部は胴部中央よりかなり端に寄り，やや開きながら立ち上り，中央に１条の沈線がめぐる。調整は胴部最大径より２cm下から底部にかけてはヘラ削り，その他は横ナデにより仕上げられる。30は全体的に丸みのあるやや偏平な胴部で自然釉が付着している。口縁部は胴部中央より片寄ってやや開きながら立ち上り，端部外面に沈線がめぐる。調整は底部がヘラ削り，その他は横ナデによって仕上げられる。

甕（31）　胴部は球形に近く，底部はやや尖りぎみとなる。頸部は短かく，外反しながら口縁部となる。口縁部は強く外反し，端部は内傾ぎみにつまみ上げられる。調整は胴部外面は縄目タタキ，内面は青海波タタキ，頸部から口縁部にかけては横ナデにより仕上げられる。なお甕の底部近くには焼き台が付着したまま残されている。この焼き台は天井部の平坦な杯蓋のような形状を呈しており，類似したものが倉敷市寒田５号窯址（註１）から出土している。

土師器（第17図）

土師器は壺が１個体出土したのみで，他に破片は認められなかった。壺は胴部がやや偏平な球形を呈し，やや外反ぎみに立ち上る口縁部をもつ。口縁部は頸部より外面器壁に厚みをもたせて区別している。調整は口縁部内外面は横ナデ，頸部は荒いヘラ磨き，胴部外面は若干ハケ目を残すがヘラ磨き，内面はナデによって仕上げられている。

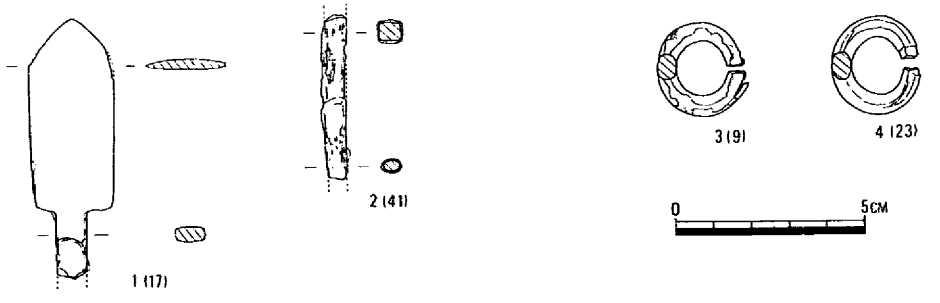
鉄製品（第18図）

鉄鏃（１）　鉄鏃は広根式で，鏃身は両丸造りの平板である。

鉄釘（２）　鉄釘と考えられるもので，断面は方形を呈し全面に木質が残存している。

装飾品（第18図）

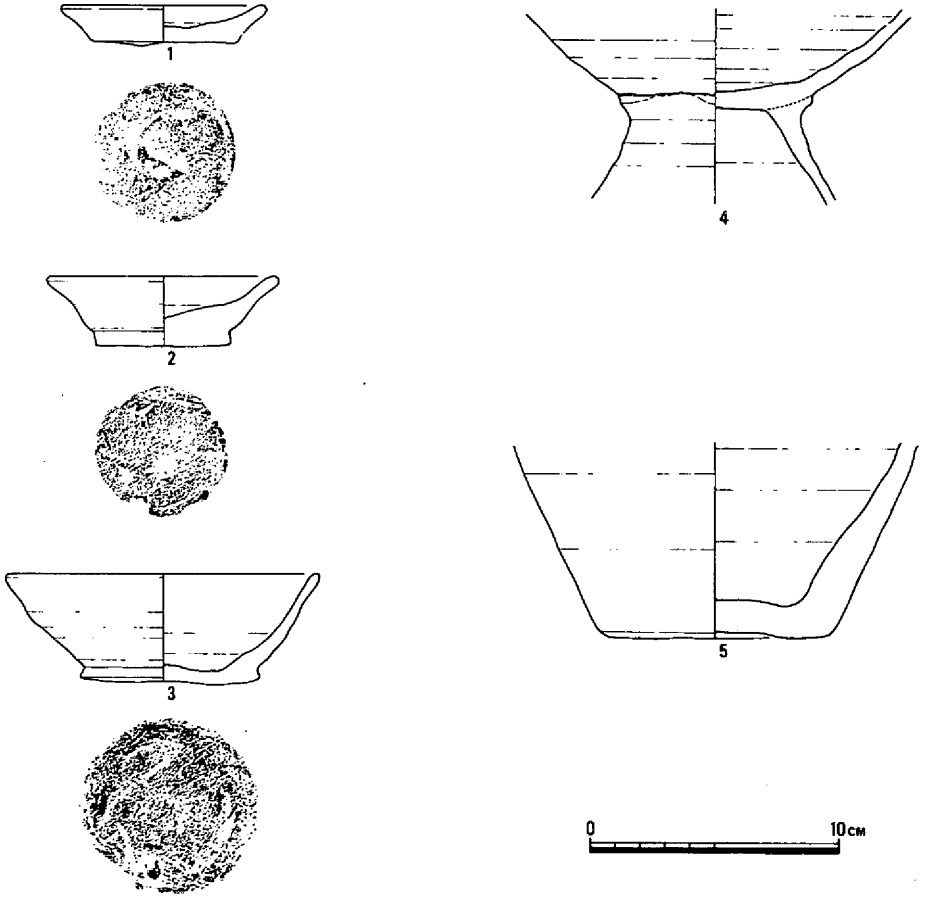
耳環（３・４）　耳環はいずれも銅地銀張りで，錆のため銀箔の剥離が著しい。３はやや楕円形を呈し，長径2.5cm，短径2.3cmを測る。４も同じくやや楕円形を呈し，長径2.6cm，短径2.3cmを測る。



第18図　石室内の副葬品(5)

第５節　石室内出土の中世遺物

中世の土器は１が１号陶棺内から出土した以外はいずれも陶棺の身上端近くの高さから出土し，それ以外には認められなかった。１は土師質の小皿で口径8.2cm，器高1.6cmを測る。調整は底部がヘラ切り，内面は不規則なナデ，口縁部内外面は横ナデにより仕上げられる。色調は赤褐色を呈し，胎土に細砂粒を含む。２も土師質の小皿で，口径9.2cm，器高2.8cmを測る。底部は厚くつくられ高台状を呈している。調整は底部が糸切り，その他は横ナデにより仕上げられる。色調は暗赤褐色を呈し，胎土には細砂粒を含む。３は土師質の杯で，口径12.4cm，器高4.4cmを測る。底部はやや粗雑なつくりで高台状を呈する。調整は底部内外面とも不規則なナデ，その他は横ナデと考えられる。４は脚のつく椀と考えられる。内外面とも横ナデによる凹凸が著しい。色調は赤褐色を呈し，胎土に赤褐色の鉱物と砂粒を含む。調整は底部内外面とも不規則なナデ，その他は横ナデに上り仕上げられる。５は備前焼の底部で，色調は青灰色を呈する。



第19図　石室内出土の中世遺物

第Ⅴ章　結　　語

古墳の規模

古墳は開墾により著しく旧状を損っていたが，トレンチで周溝が確認されたことから，山側(北側)に幅約2.2mの周溝をめぐらす，直径13m前後の円墳と推定された。内部主体は南に開口する無袖の横穴式石室で，現存長７m，石室中央部幅1.65mを測る。規模について周辺の古墳と比較すると，特に大型とも小型とも言えないが，この時期としてはやや大きな石室を有している。

古墳の年代

古墳の築造年代は副葬品の須恵器から６世紀末あるいは７世紀初頭と推定される。副葬された須恵器のうち，量が多くまた編年の基準となっている杯を例にとれば，すべて小型化していることが特徴としてあげられる。器形は杯蓋ではつまみの無いものと，宝珠つまみが付くものとが認められる。前者はいずれも天井部はヘラ切り未調整で平坦面を有する特徴をもち，口径10～12cm，器高3.6～4.2cmを測る。これに対応する杯身は杯蓋と同じく底部はヘラ切り未調整で平坦面を有し，口縁部たちあがりは短かく内傾が著しい。これを杯１類とし，宝珠つまみが付くものを杯２類とするが，杯２類の杯身は出土していない。

さてこれらの須恵器の編年的位置であるが，古墳出土の須恵器としては新しい様相を呈している。塚の前古墳の北方に所在する久米町稼山古墳群(註２）出土須恵器と比較すれば，杯１類は稼山３期に，杯２類は稼山４期に比定される。またこれらを窯址出土のものと比較すれば，発掘されたものではないが杯１類は亀ヶ原古窯址出土のものに類似する。また同様のものは寒風古窯址第１号窯址（註３）にも認められ，杯１類はＡ類に，杯２類はＢ類にそれぞれ比定される。その他にも二子御堂奥古窯址群（註４），寒田窯址（註５），新林（宮畷）窯址（註６）などの出土須恵器にも類似し，その年代は多少の幅があるが，７世紀初頭から７世紀中葉に求められている。したがって塚の前古墳の年代も概ねその時期と考えられるが，杯１類の中にやや口径の大きいものが認められる。杯蓋では１が，杯身では11がそれにあたる。これらは他の杯１類に比べ，身では器高が低くやや偏平な外観を呈し，蓋も身と同じくやや偏平で口縁部たちあがりもやや長い特徴が認められる。高杯（19）にもやや長脚のものが認められることから，若干古い様相の一群とも考えられる。したがって古墳の築造年代は一応６世紀の末に比定しておきたい。以後７世紀の前半は追葬の段階であるが，最終の追葬は３号陶棺と考えられ，その年代は出土した須恵器で見るかぎり，杯蓋に宝珠つまみの付いた杯２類の時期，およそ７世紀中葉と考えられる。しかし３号陶棺周辺は撹乱を受けており，本来の副葬品が明らかでないことなどを考えあわせれば断定はし難い。

陶棺の製作工程について

横穴式石室内には３基の陶棺が埋置されていた。３号陶棺は復元不可能なまでに壊れてしまっていたが，他の２棺はほぼ完形に近い状態にまで復元することができた。これらはいずれも土師質の亀甲

形陶棺で，規模は異なるが製作工程はほぼ同じである。陶棺の製作工程についてはすでにすぐれた論考（註７）が発表されているが，本古墳の陶棺と多少異なる点も認められるので，復元の過程で観察し得た知見をもとに本古墳の陶棺製作工程を述べてみたい。なお陶棺の各部名称は村上幸雄・橋本惣司論文（註８）を踏襲する。

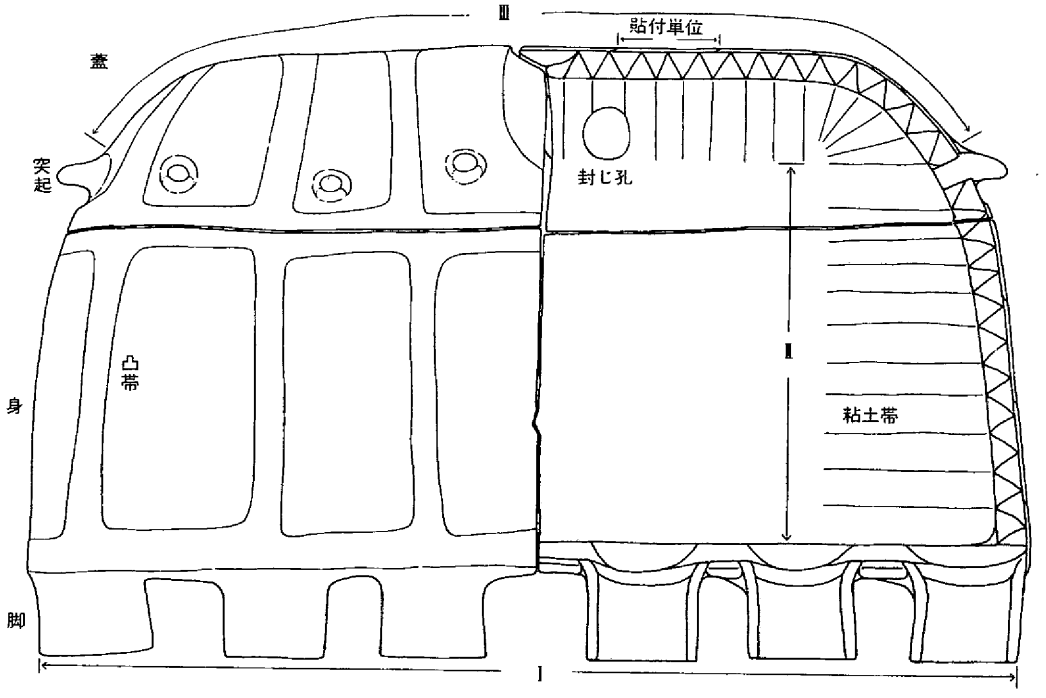
第Ⅰ工程１段階　脚の製作　中空円筒形の脚は粘土ひもを輪積みにし，外面は刷毛調整，内面はナデ調整，下端は横ナデによって仕上げる。その後身の重みに堪えられる固さにまで乾燥させる。

２段階　脚と身の底部の接合　脚を作業面に並べ，脚上端内部に粘土塊を押し込み，その後で脚上端に厚さ約３cmの粘土帯をめぐらす。その下には脚上端外面を包むように補強粘土帯が巻かれる。次に底部内面に残されていた凹部に粘土塊をつめてナデにより調整する。

３段階　底部の切断と乾燥　底部の切断はこの時点で行われたものと考えられる。これは底部の切断面はいずれも下端へのまくれが著しく，その痕跡も乾燥の進んでいない段階での粘土の動きが認められ，その他の切断面の痕跡とは様相が異なるものである。

第Ⅱ工程　身と蓋の下半部の作成　身は粘土帯を底部から内傾ぎみに積みあげてゆき，身と蓋切断後は蓋の下半分となる突起のやや上まで完成させ内外面を丁寧にナデる。上端からやや下に突起差し込み用の穴をくり抜き突起を埋め込む。ここで若干身の中央を上端から切断しておく。

第Ⅲ工程　蓋上半部の作成　蓋下半部の両端から馬蹄形状に粘土帯を積み上げ，中央部に近づくとドーム状に積み上げながら中央まで作る。中央は作業用に穿たれた封じ穴から手を入れて粘土帯で閉



第20図　陶棺模式図

じられるが，外側は皿状に凹んでいる。次に重ね部となる側には粘土帯が貼り付けられるが，受け部との間には広葉樹の葉２枚を表を合せて置き，粘土の接着を防いでいる。最後に封じ穴に粘土つめて封じる。

第Ⅳ工程　凸帯の貼り付け　凸帯は約20cmの長さが単位となる。あらかじめ凸帯を貼り付ける場所に刻みを施し，接合しやすくしたものもある。切断により身と蓋に分離される場所の凸帯は他の場所より幅の広い凸帯が貼りめぐらされる。

第Ⅴ工程　切断，乾燥　身と蓋の切断と中央部の切断はどちらが先か判断できない。

第Ⅵ工程　焼成　十分に乾燥した後焼成しているが，身と脚の接合部は焼成不良が多い。

以上製作工程を記したが，基本的には村上・橋本論文と異なる点はないものと考えられた。

古墳の被葬者について

塚の前古墳の築造者は１号陶棺に埋葬されたものと推定されるが，棺内には２対の耳環が認められることから，２人が埋葬されていたと考えられる。さらに２号，３号陶棺被葬者が追葬され，他に埋葬施設が認められないことから，最低４人は埋葬されたものと考えられる。

これらの被葬者の性格については，特に特徴的な遺物などが認められないことから，積極的に述べることができない。ただ全体的に少ない副葬品であるが，特に鉄製武器類の少ないことがあげられる。１号陶棺内には工具と考えられる刀子が５本副葬されてはいたが，それ以外は鉄鏃が１点のみである。こうした武器，あるいは鉄製品の少なさは，農業生産を基盤とし，古墳時代後期になって新らたに自立してきた有力農民の姿を想起させる。

註

註１　伊藤　晃・柳瀬昭彦・岡本寛久「黒土窯址・寒田窯址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』31　1979年

註２　村上幸雄「稼山遺跡群Ⅱ」『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』２　1980年

註３　山磨康平「寒風古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』27　1978年

註４　葛原克人・池畑耕一「山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ（二子御堂奥古窯址群）」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』２　1974年

註５　註１に同じ

註６　伊藤　晃「新林（宮嶋）窯址の調査報告」邑久町教育委員会，東備西播道埋蔵文化財包蔵地調査委員会　1974年

註７　村上幸雄・橋本惣司「亀甲形陶棺の製作工程について」『考古学研究』第26巻第２号　1979年

註８　註７に同じ

1. 塚 の 前 古 墳 遠 景（南から）

2. 塚 の 前 古 墳 近 景（南から）

図版2

1. 古　墳　の　現　状（南西から）.

2. 古　墳　の　現　状（南から）

1. 発 掘 調 査 状 況（北東から）

2. 発 掘 調 査 状 況（北から）

図版4

1. 横　穴　式　石　室（北から）

2. 横　穴　式　石　室（南から）

1. 1号陶棺周辺の副葬品出土状態（北から）

2. 1号，2号陶棺間の副葬品出土状態（東から）

図版6

1. 2号陶棺南東部の副葬品出土状態（東から）

2. 石室入口の副葬品出土状態（南西から）

1. 1号陶棺出土状態（東から）

2. 1号陶棺内副葬品出土状態（直上から）

図版8

1. 2号陶棺出土状態（東から）

2. 3号陶棺出土状態（北西から）

1. 陶棺取り上げ状況（南から）

2. 陶棺取り上げ状況（南から）

図版10

1. 陶棺取り上げ後の石室（南から）

2. 石　室　東　側　壁（北西から）

1. 石　室　西　側　壁（北東から）

2. 古　墳　の　周　溝（北西から）

図版12

1. Ｎトレンチの周溝（南東から）

2. ＮＷトレンチの周溝（東から）

1. Wトレンチの墳丘盛土（南から）

2. Wトレンチの石室掘方（南から）

図版14

1．1　号　陶　棺

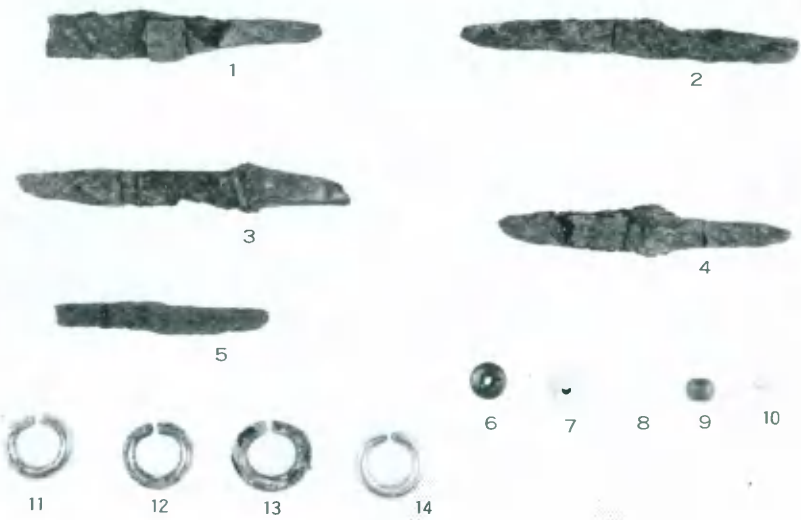
2．1 号 陶 棺 の 封 じ 孔

1. 1号陶棺の受け部木葉痕跡

2. 1号陶棺底部の小孔

図版16

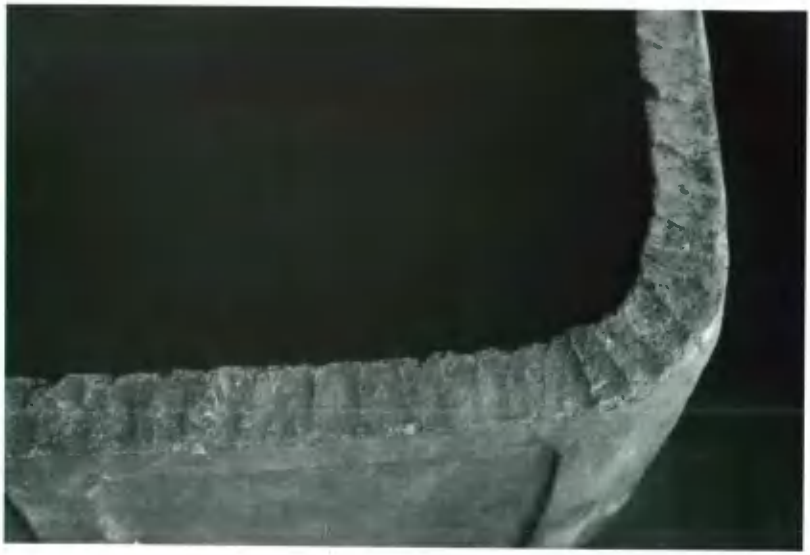
1．1　号　陶　棺　脚　部



1　号　陶　棺　内　副　葬　品

1．2　号　陶　棺

2．2号陶棺の重ね部木葉痕跡



1．2号陶棺の身上端切断痕跡

2．2号陶棺の身凸帯

1

6

2

7

3

8

4

9

5

10

石室内の副葬品〈須恵器〉

図版20

11

16

12

17

13

18

14

15

19

石　室　内　の　副　葬　品〈須恵器〉

20

21

22

23

24

25

26

27

石室内の副葬品〈須恵器〉

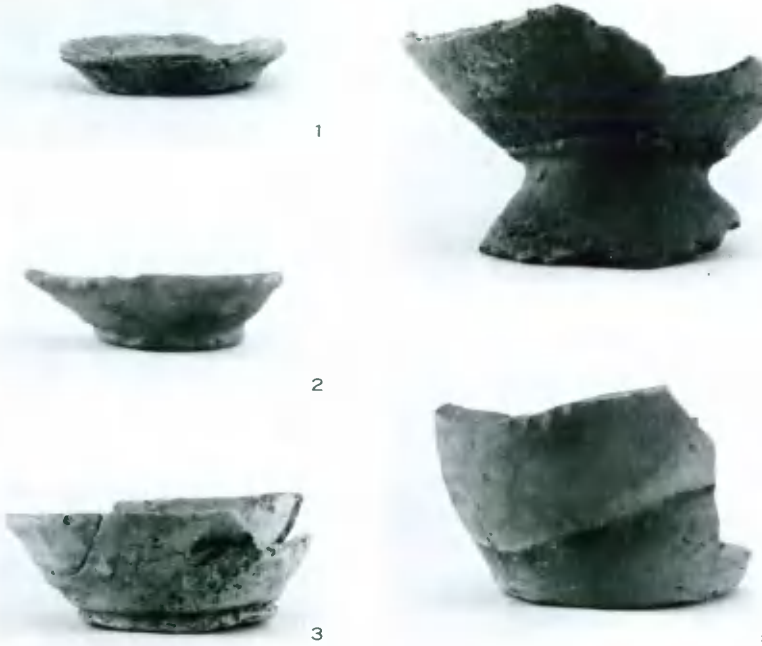
石室内の副葬品〈須恵器・土師器〉

1. 石室内の副葬品〈須恵器〉

2. 甕底部に付着した焼き台

図版24

1. 石室内の副葬品〈鉄製品・装飾品〉



2. 石室内出土の中世遺物

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 44

塚の前古墳

昭和５６年３月２７日　印刷
昭和５６年３月３１日　発行

編集・発行　岡山県教育委員会
印　刷　岡山県出納局用度課